教育実習前支援アンケート並びに教育実習前検定の効果

― 小学校教育実習における成績評価の検討―

林美都子、半澤礼之、松橋博美、蛭田眞一（北海道教育大学）

１.本発表の目的と課題

林・半澤・松橋・蛭田(2015)では、教育実習を体験する際に重要となるであろう諸要素として、学習意欲をはじめとして、児童・生徒や指導教員、保護者、実習仲間との円滑なコミュニケーションを行うためのソーシャルスキル、適切な反省活動に重要と思われるメタ認知等を刺激し、より充実した教育実習を実現するための主観的準備状況を高める教育実習前支援アンケートを実施した。その結果、教育実習前支援アンケートに参加した学生の方が、参加しなかった学生よりも教育実習成績がＡとなる割合が高くなることが示された。林他(2015)ではフィードバックは実習後に行われたにも関わらず実習の成績分布が向上したのは、アンケートの質問項目によって、狙い通り、実習に必要な諸要因に学生の意識が向いたことによるのではないかと推察された。買い物に出掛ける際に、「先月の買いものは予算の範囲に収まっていましたか？」などと尋ねられた場合、尋ねられなかった場合よりも余分な買い物は控えようとする意識が働くと期待されるであろう。

本研究では上記を踏まえ、以下２点の検討を目的とした。１点目は、林他(2015)の結果の再現性を確認することである。当該研究の性質上、同一学生に対しアンケートに参加した場合と不参加の場合のデータを収集することは不可能である。そのため、一度だけでは、アンケート実施による成績向上が単なる偶然の結果である可能性を排除することは難しい。

２点目は、アンケート等で刺激される主観的な要素だけではなく、教育実習に関わる知識に関する準備準備状況も整えることにより、さらに充実した教育実習がもたらされる可能性について検討を行う。教育実習前検定として、教育実習の１～２カ月程度前に、客観的に正誤が明確な教育実習関連知識についてコンピュータ上で問いかけ、フィードバックをその場でコンピュータ上で行う。このような、学生自身に自分の知識のどこが不足しているか客観的な得点を示して自覚を促す活動がどのような効果をもたらすか検討する。

２.方法

調査参加者　H27年度小学校教育実習に参加したH大学3年生405名であった。そのうち、教育実習前支援アンケートに回答したアンケート参加学生群は294名、アンケートへの回答に加え教育実習前検定にも参加した検定参加学生群は36名、アンケートへの回答も検定への参加も行わなかった不参加学生群は75名であった。

材料　教育実習前支援アンケートと教育実習前検定とを用いた。教育実習前支援アンケートは、下記4種類の問いから構成されていた。いずれの問いも学生に優しく問いかけるイメージで文末は丁寧語とし、普段の自分にどの程度あてはまるか5段階評定で答えるよう求めた。但し問2は4段階評定であった。

問 1 はソーシャルスキル (菊池, 2007)、問 2 は学習意欲(下山 , 1985)、問 3 はメタ認知(吉野・懸田・宮崎・浅村, 2008)、問 4 は「ステップアップ型チェックリスト」(北海道教育大学,2010)から実習前準備にかかわる 19 項目を抽出し、構成した。

教育実習前検定は、学級経営、生徒指導、児童生徒理解、教育基本法等の法規や各教科指導法など教育実習に関連する内容を 5 肢選択形式で、ストーリー性を持たせて出題し、コンピュータ上で回答を求めるものであった。1 問あたり約 1 分間での回答を想定し、問題は 60 問出題された。

手続き　アンケート参加学生群は、教育実習の約 1～2 か月前に教育実習前支援アンケートへの回答を求められた。所要時間は約 15 分であった。検定参加学生群は、教育実習の約 2～3 か月前に教育実習前検定と教育実習前支援アンケートを経験した。検定への参加は希望学生のみを対象に実施された。所要時間は約 60～90 分であった。終了後、検定参加学生群には謝礼が渡された。また、検定成績のフィードバックは、その場ですぐにコンピュータ上に表示された。支援アンケートに関するフィードバックは、いずれも教育実習前並びに終了後に紙媒体で配布された。

3. 結果

GPA に関する分析　表 1 に示したアンケート参加学生群と検定参加学生群、ならびに不参加学生群の GPA 得点について分散分析を行ったところ、各群における GPA 得点の差は統計的に有意ではなかった ($F(2,402)<1$)。

教育実習成績に関する処理　図 1,2,3 に示したアンケート参加学生群と検定参加学生群、ならびに不参加学生群における教育実習の成績評価 A,B,C,D の分布割合を示した。各群とも成績評価 D の学生数が 5 未満

表 1. 小学校教育実習に参加した学生における教育実習前アンケート参加群、検定参加群、不参加群別平均 GPA 得点と SD

	学生群		
	アンケート参加	検定参加	不参加
平均GPA	2.73	2.68	2.81
SD	0.46	0.41	0.45

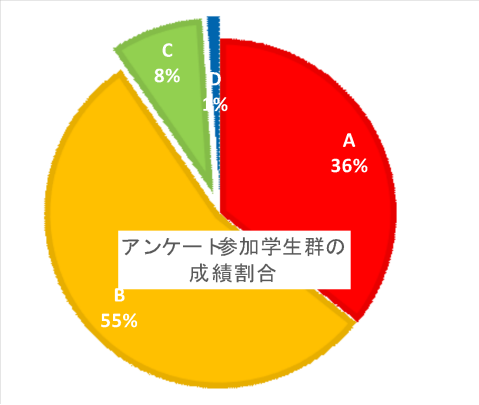


図 1. アンケート参加学生群の教育実習成績分布

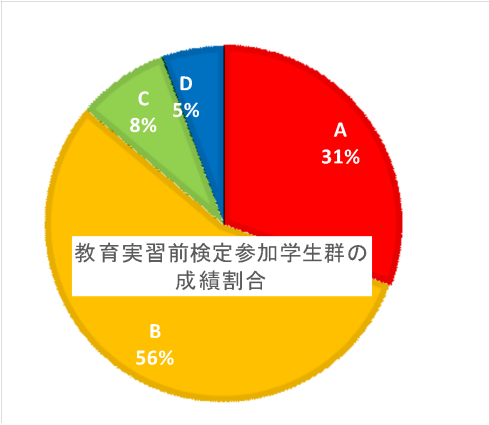


図 2. 検定参加学生群の教育実習成績分布

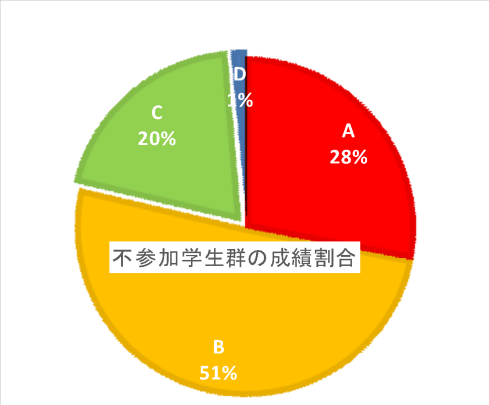


図 3. 不参加学生群の教育実習成績分布

とデータ数が少なすぎるため、成績評価 C と D を合併した上でχ自乗分析を行った。

教育実習成績に関する分析 01_2016 年度データ　アンケート参加学生群と検定参加学生群、ならびに不参加学生群における教育実習の成績評価 A,B,並びに CD の分布割合についてχ自乗検定を用いて分析した。分析の結果、各群における教育実習成績の偏りは統計的に有意傾向であった($\chi 2(4)=8.37, p<.10$)。残差分析の結果、アンケート参加学生群における教育実習成績 CD の学生数は統計的に有意に少なく、不参加学生群における教育実習成績 CD の学生数は統計的に有意に多いことが示された。

教育実習成績に関する分析 02_2015 年度不参加者データとの比較　アンケート参加学生群と検定参加学生群、ならびに不参加学生群における教育実習の成績を、それぞれ昨年度の不参加学生のデータ(林他,2015)と比較分析を行った。図 1 に示されたアンケート参加学生群について、昨年度データとχ自乗検定を行ったところ、成績の分布の偏りは統計的に有意傾向であった($\chi 2(2)=10.27, p<.01$)。残差分析の結果、今年度のアンケート参加学生群は、昨年度不参加群よりも、教育実習の成績評価が A である割合が高く、CD となる割合が低くなることが示された。図 2 に示された検定参加学生群について、昨年度データとχ自乗検定を行ったところ、成績の分布の偏りは統計的に有意であった($\chi 2(2)=4.90, p<.10$)。残差分析の結果、統計的に有意傾向としてであるが、今年度の検定参加学生群は、昨年度不参加群よりも、教育実習の成績評価が A である割合が高くなることが示された。図 3 に示された今年度の不参加群について、昨年度の不参加群とχ自乗検定を行ったところ、成績の分布の偏りは統計的に有意ではなかった($\chi 2(2)=2.45$, ns)。

４.考察

本研究の結果、アンケート実施による教育実習の成績向上効果は、偶然ではない可能性が高まった。アンケート実施により 2016 年度不参加者より実習成績 CD 評価率は下がり、林他(2015)同様、2015 年度不参加者より A 評価の多いことが確認された。また教育実習前検定も、2015 年度の不参加者より A 評価獲得率が高く、実習成績向上効果をもたらす可能性が示唆された。

【参考文献】

菊池章夫(2007) 社会的スキルを測る：Kiss-18 ハンドブック. 川島書店.

下山剛(1985). 学習意欲の見方・導き方　教育出版

吉野　巌・懸田孝一・宮崎拓弥・浅村亮彦(2008). 成人を対象とする新しいメタ認知尺度の開発　北海道教育大学紀要 教育科学, 59, 265-274.

林美都子・半澤礼之・松橋博美・蛭田眞一(2015). 教育実習前支援アンケートが教育実習に与える効果 ―教育実習の成績評価を中心とした検討― 高等教育質保証学会第五回大会論文集(要旨).

北海道教育大学(2010). 学び続ける教師をめざして　ステップアップ・チェックリストハンドブック　2010 年 改訂版　北海道教育大学

注　本研究は、「教員養成ルネッサンス・ＨＡＴＯプロジェクト」における北海道教育大学による「教育実習前 CBT」プロジェクトの一部として実施された。